

---

# 晴れのちレインボー

智桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

晴れのちレインボー

### 【Nコード】

N1851Y

### 【作者名】

智桜

### 【あらすじ】

雨女と晴れ男の恋物語であります！



た虹。

「そうですね。で？」用件を早く知りたい空流。

「あの虹、8色だよ。」

・・・

「は？」思わずそんなマヌケな事を言ってしまった。

虹は7色なんだ。それ以外はありえない。

「ほら。みてよ。1、2、3・・・」

指差して数える晴間。言うとおりに指先を見る。

「6、7、8！ほら！なんでだと思う？」

「・・・そんな・・・8色だわ。なんで？なんでなの？なんで？ありえない！」

おもわずテンションMAX。

「あれね、実は・・・オレの絵なんだ。」

「・・・は？え？」理解できない。

「だからさ、ホラ。これね、ホラ。」

目の前で起こった不思議な出来事に、目を疑った。

まどから剥がれ落ちてゆく一枚の大きな紙。

驚くほどきれいなグラデーションで描かれた虹。空。山。

すべて本物だと思っていた。

よく考えれば、それは当たり前かもしれない。

だって、今さつき雨が上がったばかりで、もう快晴なんて・・・なんで信じたんだろう。馬鹿みたいだ。

「・・・ふざけないで。」

自分が馬鹿にされていた事に気がつくのと、急に怒りがこみ上げてきて。

おもわずそんな、感情的で人間的なことを言ってしまった。すると。

晴間は意外なことを言った。

「やっぱり、ロボットなんかじゃないじゃん。かわいいじゃん！」

「・・・！？はあ！？」

もう爆発しそうだ。

何なのこいつ……

ロボット……？

なにがよ。

かわいい……？

わたしが？

いい加減な事を言う馬鹿だ。

最初はその程度しか思っていなかった。

でも、あの絵。

アレには正直驚いた。

本音を言う前にもう、晴間は姿を消していた。

「……晴間……雨宮……」

気づくとその名前を口にしていた。

## 心の境目（前書き）

君の心と俺の心は、虹で繋がると思わない？

え、思わない・・・？あはは（笑）

オレはねえ・・・思うよ。

感動って、心をつなげてくれるじゃない？

ほら、

## 心の境目

雨宮晴間、そいつは、毎日のように私に付きまとうヤツで、うざくて、うるさくて・・・

もう、うんざりだ。

機械じゃない、だとか。

コンピュータじゃない、だとか。

頭良いね、だとか。

可愛いな、だとか。

そして今日。

私は部活に入っていないわけではないが、図書委員会委員長をしているから帰りが遅い。

なのに、テニス部の早上がりのヤツが何を言うか、

『今日、昇降口で待ってるから！』だとか。

テニス部が終わってから、委員会が終わって

私は本の整理を1時間ほどして帰った。

わざとだ。

帰り際に声を掛けられては目立つからだ。

目立つのはあまり好きじゃない。

でも、本や芸術などには、心が惹かれる。

それでも委員長になったのは、図書室に居られる時間が増えるからである。

そして、雨の降り出す、暗い秋の空を窓から見ると、

夕日が頭だけ出して、ちょっとだけオレンジ色になって、グラデーシヨンがすごく美しかった。

すると

窓の下のほうで、何かがつこめいていた。

なんだろう。虫？

それは、生徒だった。

この学校のジャージを来た男子生徒で、ぴよんぴよんとはなてまで夕日を観察していた。

「晴間……？」

呟くけれど、聞こえているはずが無い。

ここは3階。確認もできない。

すると、

夕日にスケッチブックを翳した。

そして、決意したように筆を手取る。

何をするのだろうと思うと、おもむろに絵の具をぶちまけ始めたではないか。

パレットに飛び出す絵の具は、わずかな蛍光灯の光をこれでもかと反射している。

見る間に、絵の具は夕日の色を作り上げる。

でも、その色は一色。

いちばん輝きを放つ太陽の頭の、真ん中の色だけ。

スケッチブックに映し出された一色の白は、一瞬で夕日になって、

山や民家を入れない絵で、素朴な美しい夕日は、

彼のように輝いていた気がする。

夕日が沈みきる前に、書き終えてしまった。

チカチカと点滅し始めた街灯に照らし出された一枚の絵。

それは、

空を切り取ったように美しかった。

気づいたら体はもう動き出している。

はやく、晴間に会いたい

それしか考えられなかった。

階段を駆け下りて、駆け下りて、何段もとばす。

するりするりと駆け抜ける風。

私の頬をなでてゆく。

はあはあと息を切らして、廊下を駆け抜けた。

昇降口にたどり着いた時

絶望した。

晴間の姿が見当たらなくて、涙が零れ落ちた。

そうよ、そんなヤツよ。どうせあいつはただのチャラ男よ。信じた方がバカだったの。

涙をぬぐって、息を整えて、外に出た。

真っ暗な外。街灯は切れてしまっただけ、もう明かりを灯していない。

とぼとぼと校門に向かった。

そこに人影。

シヨックで、気がつかなかった。

「空流……」

「え……？は、晴間……？」

振り返るとそこには

晴間が涙目で立ち尽くしていた。

「うう……もう、来てくれないかと、思った……俺、信じてたよ、来てくれるって……」

そんなこと、涙を流して言われても困る。

心が揺れるではないか。

どうしてそんな事いうの。

「はれまあ……ありがとう……ホントに……」

一度絶望に堕ちた心は、ピンク色に高潮していた。

なんでこんなに嬉しいんだろう。

好きじゃないのに。全然好きじゃないのに。

「オレね、空流のこと、大好きだっていいたくて、待ってたんだ。だから言わせて。」

「好きだよ。大好きだよ。」

そんなの分かってるよ。

ちがう

そんなこと言わなくても知ってたよ。

「大好きだよ。」

晴間に頼んで、さっきの絵を見せてもらった。

「これって、どうやって書いているの？この、グラデーション、すごく素敵じゃない？」

「え、ああ、それ？泣いちゃったから、滲んだだけ。ホントはちゃんと、水でやるんだけどね。」

「あはは・・・そっか。ごめんね、待たせて。わざとなんだ、遅くまで本の整理してたの。」

「え！？ええ・・・やっぱり？オレの事嫌いだから、帰って欲しくて遅くしてたんじゃないの？」

「え？・・・うん。最初はね。さっき、絵書いているときの晴間、かつこよかったよ。」

「！ホント？うわー、はずかしーな、改めて言われちゃうと。」  
「でも、晴つ！！！！？？？？」

「ごめん、驚いたでしょ。ごめん。でも、抑え切れなかった。抱きしめられたぬくもりが、いつそう頬を赤らめさせる。」

このまま幸せに包まれていたいけど、そろそろ帰らなくちゃ。家に帰るのが嫌なんて、初めてかもしれない。

「帰るね・・・ごめんね。もう遅いから。」  
「送っていくよ。」

「ええ！？え、いいいや、い、あ、いいよ！大丈夫！」

「いや、でも・・・じゃあ、せめて途中まで。」  
「・・・え、じゃあ、迷惑にならない程度に・・・。」

でも、結局晴間はついてきた。

「家この辺なの？」もう少しでついてしまうのに、まだついてくる

晴間。

「え？うん、そだよ。空流って、この辺？」

「うん、すぐそこ。」

「へえ。え、え？そうなの！？え！？？」

私の家から一軒の家をはさんで、左隣が晴間の家だった。

「知らなかった・・・」

雨女と晴れ男。

二人は幸せに暮らしましたとさ。

おしまい。

心の境目（後書き）

ほら、繋がった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1851y/>

---

晴れのちレインボー

2011年11月15日04時26分発行